



染液に手を入れた瞬間、
藍染めに魅せられました。

それは、ぬめり気のあるぬるま湯に手をつけたような、まわりつくような感触だった。まるで手のひらから浄化されるような瞬間。

12年住んだ東京から室戸に帰ったのは、東日本大震災のあと。幼い娘が余震を怖がり、原発や食材の安全も考えてのことだった。

「欲しいものも仕事もないからと東京に出たけれど、帰ってきたら室戸がどれだけ豊かな土地かと思い知りました」

そしてたまたま藍染めを体験したことで、新たな世界が開けた。

原料となるアイの葉が不足していると知り、完全オーガニックの葉づくりから始めたのが2年前。SNSなどで拡散し、「お気に入りのTシャツやシミのついたワンピースを染めてリメイクしたい」というニーズに対応したり、オリジナルの小物など制作している。

「まだまだアイが足りない。室戸には休耕田も多いので、アイ作りや藍染めを一緒にできる仲間を増やしたい」と、体験イベントで楽しさを伝え、最近では、手伝いをかってでてくれる若者も増えた。

もうひとつの顔は、港の上のBAR経営者。室戸には若者が遊ぶ場がない、だったら作ろうと。今では若者と、音楽好きのかっこいいおじさんの憩いの場だ。昼はアイの畑仕事や藍染め。夜はBARやDJ。

ふたつの顔を見守るのは、16歳からのつき合いという妻。不安はあるが、震災をきっかけに人生をリセットしようと話した。子育てによく、私たちも成長できる室戸に、戻ったことに悔いはない。

Riddim Blue
中内洋介・那津子

室戸じと、 進む。